

# ヒーロー社会の継続高校

島田愛里寿

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

継続高校。

フィンランドを模したガールズ＆パンツァーに出てくる学園艦。

そんな本来僕のヒーローアカデミアにはない学園艦で風に流される者たちはヒー  
ロー社会への反発をしていく。

目

次

プロローグ

設定

第一話 転生

第二話 召喚

第三話 北欧へ

20 16 12 6 1



# プロローグ

## 継続高校

この高校はガールズ＆パンツァーに出てくるフインランドをモデルにした高校だ。学園艦の母校は石川県の金沢港で艦のモデルはフインランド海軍が第二次世界大戦前に建造した海防戦艦のイルマリネン級だ。

そう、この高校は：いや学園艦自体もこのヒーローアカデミアの世界にはないはずだった。

はずだった⋮⋮

オホーツク海上

ポロロン♪♪

ここは雪が降っているオホーツク海。ここには本来の歴史では存在しないはずの超大型艦が航行していた。

「ミカー！ミカー！どこ行つたのよもう！」

「あ、アキ。どつたの？」

「あ、ミツコ！ミカは見てない？伝えなきやいけないことがあつて」

「ああ！ミカならヨウコと一緒に学園艦の艦首の方にいたよ」

「ありがと!!」

この二人の少女はアキとミツコ。ある人物の親友にしてその人物の個性で召喚された者だ。

そしてその者は二人が今探している人物でもある。

継続高校学園艦艦首

ポロロン♪

「たまには船首で風を感じるのも悪くないね」

「…まあいいけどさ。こんなところでカンテレ弾いていいの？」

「いいのさ。そもそも艦の操舵に関しては大体みんなに任せてるし艦内の治安もほぼ安定している。ヴィランもいないしね。またたまに海賊が来るけどレーダーには映つて

ないし問題ないさ」

「はあ。まつたくあいかわら「ミカー!!」：なんか来たみたいよ？」

「そのようだね」

「あ、ここにいた！ミカ!!手紙が来てるんだよ!!」

「手紙？よくどこの港に寄港するかわからないこの船に届けられたね？」

「そんなのはいいから!!ミカ宛なの!!」

「私に？私に送るなんて意味があるとは「あるの!!」分かつた分かつたよ」

そう言つて彼女は渋々手紙を受け取つて読み始めた。

（島田美香様へ）

「家は現在財閥と言われるまで成長しました。母も私もお姉ちゃんが家に帰つてくるのを心待ちにしています。たとえお姉ちゃんがヴィジランテだつたとしても組織を率いていたとしてもお姉ちゃんは私のただ一人のお姉ちゃんです。あの父を自称していだ屑はすでに“処理”しておきましたので安心してね……（――）出来れば今すぐに帰つてきてね？」

追伸：お母様が『あの放浪娘はどこに言つたのかしらね？』って西住家の当主さんと心配しつつ激怒してるからできれば早く帰つてきて!!身に危険を感じてるから!!』  
「…………（； 丶。）」

「どうするの？ って言うかミカ島田財閥の娘だつたの！？」

「あ～まあそういうことになるのかな？」（というかいつの間に…）  
「で？ どうすんのさ？ 帰るの??」

「でもさミツコ。この艦の大きさだと東京湾に入ろうとしたら目立つてすぐに制圧されるし裏社会の面子もいるからヒーローが制圧に来るんじやない？」

「あーだね、ヨウコ。で、どうするミカ？」

「仕方ないね。百人隊長が助けを求めてるんだしね」

「へ？」

「ん？」

「？」

「帰ろうか。まあ港には小型艇で入るとしてね、久々に日本に帰ろうか。アキ、操舵艦橋に進路変更を伝えてくれるかい？ ミツコは戦車隊員たちに上陸申請するか聞いてくれ、ヨウコは船底の面々にも伝えてくれ」

「「「了解！」」」

そうして三人が艦の各エリアに走つていった後にミカはつぶやいた。

「転生してから風に流されて過ごしてきたけどそろそろこの世界の実家に帰る風が吹い

たのかもね』

# 設定

・島田美香

主人公にして転生者。前世は男子大学生で、ガルパンファンだつた。ヒロアカはアニメでしか見ていない。

転生した直後はいろいろ慌てたがそれ以上に当時の父が屑だつたため母を守ることを考えて行動していた。しかし、ついに母が妹の愛里寿を出産した後に離婚を決意した際にそれに感づいた父に誘拐のような方法で連れて行かれて家事を無理矢理やらされたり虐待などを受け続けた。

そして中学を卒業するころに遅れて個性が発現して家出して海に学園艦を召喚して継続高校のリーダーとなつた。

あだ名は名無しのミカ

・個性 繼続高校

ガルパンの継続高校関連の物を召喚できる。

・アキ

ミカが召喚した者の中でも最初期に召喚された者。BT-42では装填手と砲手を兼任しているが参謀としての能力も高い。

食欲旺盛なのが太らないのでみんなからうらやましがられている。

なお最近はムーミンに興味を示しているとか…

好きな戦車

BT系の戦車

・ミツコ

BT-42の操縦手。天才的なドライビングテクニックを持つており、野生児的な性格の持ち主。アキやヨウコと同時期にミカに召喚されたので最初期のメンバーでもある。

結構手癖が悪いことでも有名。（とはいってこれは継続高校全体に言えることだが……）

彼女もムーミンを気にしている。

好きな戦車

T-34系列

・ヨウコ

継続高校においてミカの他に唯一二つ名を持っている少女。二つ名は『白い魔女』。もともとは継続野球部所属だったが召喚された直後にミカにその才能を見込まれてJSUやKV系列の砲手を任せられた。

スナイパーとしての才能が有り余つており、普段も野球ボールを狙撃じみた精度で投げるので彼女の正体を知らない一般の野球チームからスカウトの話が来ている。

趣味は意外にも狩りであり、モシンナガンを私物で持っているのでよく狩りに行くのだがいつも白色の合羽を着て狩りに行く上に狙撃もベテラン以上の腕の持ち主なのでかつて継続戦争にてソ連軍を苦しめた伝説のスナイパーである、シモヘイへの再来とまで言われている。

性格は寡黙でアキと同じくらい真面目。とはいえて一度拗ねるとミカでもてこずるくらい駄々をこねるというかわいい一面も持っている。

艦 자체はイルマリネン級がモデルで、特徴的なマストはクリスマスツリーとなつているので寄港地でクリスマスイベントを開くのが通例になつてきてている。この時はさすがにヒーローや警察も手を出さない（というか出せない）。町はフィンランドにあるサンタクロース村をモデルにしており、フィンランドの食べ物をよく販売している。あとは雪原が広がつている箇所と人工山が大部分でそこでミカは戦車隊の訓練をしている。なお山ではよくヨウコが狩りに出掛けている。

船体の下層にはロシアやフィンランドのマフィアが乗り込んでおり、ミカとの取引でヤクと人身売買や臓器売買をしないならかまわないという条件で乗り込んでおり、彼らのおかげで勝手に乗り込んできたヴィランの処理が手早くすんでいる。

- ・ 繼続高校保有戦車

- B T — 4 2 快速戦車

- T — 2 6 軽戦車

KV-1 重戦車

T-28 中戦車

T-34 中戦車

JSU-152 駆逐戦車

といったかつてフィンランド継続・冬戦争にて鹵獲したソ連系列の車両が大半を占めている。

# 第一話 転生

(……？あれ？ “私”は家で寝ていたはずじゃあ？つてん？ 私??)

「あなた！もういい加減にやめて頂戴!!」

「うるせえ!!俺に指図するんじやあねえ！」

バキ!!

「きやあ!!」

(!??)

彼女は混乱の渦にあつた本人は本来は男性であつたしそもそも大学生であつたはずなのだ。なのにいきなり赤ん坊になつており、しかも心の自分の認識が女であつたことにも驚いたが母であろう女性が父であろう男に殴られていたのだ。

(あ、あれって島田千代!?しかもあれはどう見てもDV!?)

しかもその母がガールズ＆パンツァーに出てくる島田流家元島田千代そつくりであつたのにさらに驚いた。

(こ、これからどうなつていくんだろうか……)

そして小学生高学年になるまでの間、彼女の人生は波乱万丈な物となつた。母を守るために父の機嫌をできるだけ損ねないように生活しつつ、母のケアなどをしていた。

そして小学六年生の冬。

「ねえ美香」

「…どうしたんだい？ 母さん」

「妹ができたみたいなのよ…」

「…世間一般からすればめでたいことだけど…うちじやあ悲劇を生むだけかもしないね」

「そうよね？だからもう離婚しようと思つてるのよ」

「!!いいじやないか。でもなんで今まで検討しなかつたんだい？」

「実家に迷惑をかけると思つてたのよ…家の実家つて結構大きな会社でね？」

「なるほどね…家柄や面子の問題か…」

「ええ。おばあ様は反発してたのだけど母様がおばあ様を怒鳴りつけて帰ってきていいと言わされたのよ」

「そうかあ。じやああと少しであいつとも別れられるね」

「そういうこと」

そんな会話をした日の夜

「おい！起きろ！」

「んんん？どうしたんだい父さん？こんな真夜中に??」

「いいから起きやがれ!!」

「え？がほお!?」

突然たたき起された美香は父にお腹をけられて気絶させられた。

そして目を覚ましたところ…

「え？ここはどこだい??」

「ふん！お前らが俺のところから逃げようとしてることなんてお見通しだ！だがお前は俺の世話をしてもらうために来てもらつたのさ!!」

「……ええ？」

そうして終わると思つていたつらい生活を彼女はしばらく続ける羽目になつた。

一応ここがヒロアカの世界だとわかつていた美香はヒーローや警察に助けを求めたが、ヒーローはよりもよつて父に確認して言いくるめられて帰つて行つて逆に殴られるといった状況を引きおこし、警察も似たような感じな上に逃げたら職質受けて家出とみなされて帰らさせるという無能さを見せられたので信用しなくなつていつた。

しかもどういうわけか個性が発現しなかつたので中学校でもいじめられ、家でも虐待を受けるというサイクルにはまつてしまっていた。

そしてそんな生活を送っていた中学生のある日。

「こ、これって…」

空地で黄昏ていた彼女の手にカンテレが現れた。しかも継続高校の校章が刻まれて

いたのだ!?

「…これからすると継続高校関係の物を召喚する個性なのかな? 中学卒業したら家出する方がいいね」

(でも妹や母にも会いたいなあ…)

そうして数日後の卒業式後、彼女は行方をくらました。

## 第二話 召喚

屑父の家から出奔してきた美香は近くの港にいた。

「さて…継続系ならあれかな？」

そう言つて彼女は揚陸艇（ガルパン劇場版でミカ達が対大学選抜との試合の後に帰る際に乗つてたやつ）を出現させた。

「やっぱりね…なら学園艦も当然かな？とはいってもここは日立つから遠洋でやらな  
いとね」

そして美香は揚陸艇に乗つて夜の闇に紛れて北の海に船出していった。

（ちなみに彼女は一応父に置手紙を残してきたが、父が連れ戻そうとしていることは分  
かっていたのでさつさと日本から出て行つた）

そうして彼女は継続高校学園艦を召喚したのだが…：

「いやはや…予想以上の大きさだね」

(ベーリング海でやつた方がよかつたかな?)

あまりの大きさに啞然とした。まあ何はともあれ彼女は乗艦した。

「さて…まずはなんで君たちもいるんだい?」

「何言つてんのミカ!あなたが召喚したんでしょ!」

「…もしかしてまとめて召喚したせいかな?」

「そうだよ!」

「なんとまあ…。(ーーー;)」

そう。彼女は継続高校の学園艦を召喚することしか考えておらず、乗員や生徒まで召喚するとは全く考えていなかつたので乗艦したとたんに原作にてミカの相棒である二人、アキとミツコ。そして白い魔女と言われるヨウコに囲まれて説教させていたのだ。

(彼女たち曰く、美香が個性発現したと同時に謎の空間に学園艦とともに転移し、それからどういうわけか美香の視点が共有されていたそうな)

「まあいいか。さて、これからどうしたものかな…」

「あれ? 父親に報復するんじやあないの?」

「な、なかなか過激だねアキは。確かにそれもいいとは思うよ?でもね、この世界には

ヒーローがいる」

「「ああ…」」

この三人も美香の視点を共有していた関係上美香の懸念を見抜いた。  
なにせこの世界『僕のヒーローアカデミア』は個性優位至上主義だからだ。まあ漫画やアニメではいいヒーローにあこがれヒーローになるために雄英生になつて活躍する主人公の視点で描かれているのでそれ 자체は問題点はない。

だが漫画やアニメではなく、それが現実であるとくればいささか状況は異なる。個性保持者のヒーロー、すなわち個性保持者至上主義・ヒーロー至上主義と個性種類差別・無個性者差別の台座ができやすく、すでに多発しているからだ。

特にオールマイト登場後は子供の間で事態は悪化しており、無個性者や親がヴィランである者、ヴィランっぽい個性持ちの子へのいじめや差別が多発し、警察もヴィラン引き取り係なんて揶揄されるほどに頼りなくなり、いじめ等にも真摯に対応したためしないのだ。

しかもヒーローの誤認で負傷したりした場合も満足な保証は一切なく、無個性者に満足に対応する者はごく一部なために美香はヒーローを全く頼りにしていなかつたが、父に報復した際に満足に装備もない現状でちよつかいかけられたら失敗するのが目に見えているのだから。

「まあしばらくは風に流されていこうか。北極海経由で北欧に向かうように学園艦の進

路を取ろう」

そうしてヒーローアカデミアの世界に無かつた継続高校学園艦が誕生し、後にヒーロー社会への楔を打ち込むこととなる。

### 第三話 北欧へ

日本沿岸から出航した継続高校学園艦。

その艦上でいつも通りカンテレを弾いていた美香であつたが元の実家は混乱のただなかであつた。

「どういうことよ！」

「知るかよ。俺が帰つて来た時にはもいなくなつてたんだ。どつかで野垂れ死んでんじやねえか？」

「この！」

「奥さん！落ち着いて!!」

美香が父親に連れて行かれたことを知った千代が警察とヒーローに訴えて捜索してようやく父親の家を見つけたもののこの数日前に美香は出て行つてしまつており、千代は彼女を探そうともせずに酒を飲んでいた元父に殴りかかるとしていた。

まあヒーローや警察に止められていたが…

「どこに行つたのよあの子は…」

同時刻 オホーツク海上

「ミカ！ミカ！」

「うん？どうしたんだい、アキ？」

「ミカが前にいたとこに住んでたお父さんがニュースに出てて逮捕されたみたいだよ？」

「そうか……」

（ううん。もう数日待つてればよかつたかな？まあ風に流されて生きるのもまたいいものかな？）

ミカとしてはもう数日耐えていれば母のもとに帰れたのかな？と思つていたが、何かと自由な生活を送れたことのない彼女は後でまた会えるだろうと思い風に任せることにした。

「でもよかつたの？妹が生まれたんでしょう？」

「母さんならしつかりと育ててくれるさ。私みたいなひねくれ者にならないようにね」

「あ、ひねくれ者の自覚あつたんだ…」

「それはどういう意味だい？（――#）」

「……（？――？）」

アキの言葉にはさすがのミカも聞き捨てならなかつたらしくしばらく追いかけっこ

することになつたのはしばらくの間継続高校学園艦ではお約束となつた。

そんなこんなでも学園艦はオホーツク海を超えて北極海に入り、ロシア領海の外縁に沿うように西進。北欧へと舵を取つていた。

「両舷前進半速」  
「機関両舷前進半速！」

ガヤガヤ……ワイワイ……

とはいゝこの巨大な艦は目立つためにロシアなどの沿岸部や上空を飛ぶ飛行機に捕捉されて話題に上がつたりしてしまつた。

『謎の超大型艦！船の上に町が！？』

『謎のヴィラン組織か！？』

「まずいね……」

偵察班が入手してきた号外記事をみたミカは航海科に通達し、航路を流水が多い危険海域に取らせた。

「ねえミカ…。こんなところを通つて大丈夫なの??」

「タイタニック号にはならないと思うよ？」

そんなこんなありつつも学園艦は北欧のフィンランド近海へと到着した。

「さて…交流できなくとも放棄された戦車博物館なんかで戦車があればいいんだけどね  
…」